

## 渡谷利香作 「親友」

ナレーション 杉山厚子は、今年高校入学したての 1 年生です。新しい学校、新しいホームルームにすっかり慣れ、新しい友達もでき、高校生活が楽しくなる季節なのですが、彼女は独りぼつねんとしています。もともと内向的な性格なのですが、いくら内気でも、普通ならもう 1 人や 2 人の友達はできていてもいいのですが…。

杉山厚子(モノローグ) わたしが友達をつくらない理由？ だって必要ないじゃない。まあ、中学時代、いろいろあったしね。

確か中 2 のころだったわ。わたし、親友だと思っていた友達がいた。彼女は人気者で、席も近かったし、すんごく仲が良かった。そんなある日――。

音楽 (ブリッジ 回想)

厚子(エコー) ねえ、洋子、わたし、あなたを一番の友達だと思ってる。それでね、相談に乗ってほしいことがあるの。

洋子 え？ あの、あたし、ごめんね。今まであなたのこと、そんな風に考えてなかった。あたし、2 組の桜田さん、知ってるでしょ。あの人と、小学校から親友同士だったの。あの、それでよかったら話してくれない？

厚子(モノローグ) あの時は、すごいショックだった。悔しいような、悲しいような…。自分ではどうしようもないと分かってても、やっぱり悲しかった。それからしばらくたって、ほかの友達ができたんだけど、グループ 3 人で、みんな同じ音楽が好きで、一緒に行動していたんだけど…。

音楽 (ブリッジ 回想)

トオル なあ厚子、ミツオって最近やな感じだと思わないか？

厚子 どうして？

トオル だって、何かって言うと育ちのいいところ見せびらかしてさ、

厚子(モノローグ) トオルは、ミツオの悪態をさんざんついていました。次の日の放課後、わたしがトイレから戻り、教室の前に立った時、トオルとミツオの話し声が聞こえました。

トオル なんかさあ、最近おれ、厚子が嫌いになってきちゃったよ。

ミツオ おれも。あの子、まじめだろ。合わないんだよな。

トオル 同じ趣味だし、レコードいっぱい持ってて、利用価値あるし、割といい子っぽいから付き合ってたけど、最近疲れるよ。

ミツオ 言えてる。

厚子(モノローグ) あの時は、なんて言うか、人間なんて信じられなくなった。もう本当にやんなってしまった。友達なんて金輪際 必要ないと思った。心から通い合っていると信じていたのに。あの人たちと通い合っていたのは、同じ趣味を媒体とした自分の利益だけだった。それも悲しかったけど、トオルの、こっちでミツオの中傷をし、あっちではわたしの中傷をするという汚さ、いい加減さ。そこから必然的に生まれてきた心の食い違い、そしてそれをどうしようもできない悲しさ。もう友達なんて要らない。「友達なんて表面だけだ。人間同士なんて、そんなもんだ」って言われればそれまでだけど、友達って、友情なんてそんなもんじゃないと今まで思ってた。だから今は、だれとも付き合うなんてまっぴら。もう傷つくのも、惨めな思いするのもごめんだけ。

ナレーション 2度にもわたる、友達との人間関係から受けたダメージは、彼女を人間不信に陥れ、人と付き合うことの楽しさを忘れさせてしまったのです。

そんなある日、彼女のクラスで席替えがありました。そして、彼女のとなりに、割と明るくて人気のある、幸田恵が来ました。

幸田恵 よろしく。

厚子 あ、よろしく。

恵 ねえ、あなた、いつも独りでいるのね。寂しくない？

厚子 別にそうでもないわ。

恵 変わってるわね。女の子って、たいてい群がるのが好きなのに。わたしも、あんまりゴシャゴシャいっぱいいるのは好きじゃないけど、心の通う友達の一人ぐらいは欲しいわ。

厚子 そう？ わたしは、そもそも人間同士の心のつながりなんて信じてないわ。

恵 ずいぶんなこと言うわねえ。人の士気を折るようなこと言わないでよ。わたしはそう思ってるから。それに、神様だって「人は独りでいるのはよくない」って言ってるわ。

厚子 神様がなんだって言うのよ。そんなもん、いると思ってるの？

恵 思ってるわよ。

厚子 じゃあ、神様っていうのは、ずいぶん不公平なのね。えこひいきが好きなのね。

恵 そんなことないわ。神様は平等にすべての人を愛してくださっているわ。

厚子 あなたは、人間関係でわたしみたいにひどい目に遭ったことないから、そう思っているのよ。

ナレーション 幸田恵は、その夜、心を込めて神様に祈りました。

恵 (祈り)神様、わたしは、杉山さんが友達をつくらないのは、独りでいるのが好きなんでも、友達をつくれないうんでもないと思います。彼女だって、本当は心の通じる友達が欲しいと思ってるんじゃないのでしょうか？ でも、裏切られたりして、もっと寂しい思いをするのが怖いから、避けているのかもしれない。神様はすべての人を愛しています。だから彼女の孤独は、これから愛をはっきり知るための下準備なのかもしれません。どうぞ神様が心を開いてくれますように。

ナレーション それからしばらくして、文化祭の準備をそろそろ決めなければならないころ、クラスで、2人執行委員を選ぶことになりました。

先生 おい、立候補はいないか？ では推薦。

女子 あ、幸田さんがいいと思います。

先生 では、幸田と思う者は手を上げろ。1、2、3、4…。うん、決定だな。

恵 先生、わたしが選ばれたなら、わたしのパートナー、自分で選んで構いませんか？

先生 ふむ…。みんな、異議はないか？

全員 異議なし！

先生 では構わん。で、だれにする？

恵 杉山さんです。

先生 (厚子に)杉山、ということだ。よろしく頼むぞ。

厚子(モノローグ) 幸田さん、あの人、どういうつもりなのかしら？ 一体わたしに何をしろと言うの？

ナレーション こうして始めた委員の仕事も、二人の時間の都合がつかないために、結局、分担してやることに決めました。ところが、幸田恵が手際よく仕事を片付けていくのに対し、厚子は、元々

ノロマなのか、仕事をたっぷり ため込んでしまったのです。しかも、文化祭はあと3日後に迫っていました。

厚子 みんな、ごめんなさい。わたしの不手際で、文化祭の出し物の準備が間に合わなくなってしまったの。

生徒(口々に) 「どうしてくれるんだよ」「責任とれよな」「おれたちのクラスのはどうなるの?」「ひどいわ、杉山さん」etc.

恵 待って！ 杉山さんだけが悪いんじゃないわ。彼女を選んでおいて、よく見てあげられなかったわたしの責任もあるの。ごめんなさい。だけど、問題はもう時間がないってこと。ここでグタグタ言ってる場合じゃないわ。みんなで一緒に協力してくれない？

ナレーション それから、彼女のクラスのみんなは、迫った期日に押されながら、遅れた分の制作に取り掛かりました。初めは執行委員の文句ばかり言っていましたが、みんな、だんだん一生懸命になってきました。それというのも、真剣に仕事に取り組んでいる厚子の姿に、いつしかみんなも心打たれていったからです。

男子 あと1日だ。みんな、頑張ろうな！

女子 そうよね。頑張りましょう。

ナレーション そして、やっと展示作品が出来上がったのです。そこには、みんなで何かをやり遂げた充実感がありました。

男子A やっとできたなあ。

男子B 結構苦しかったけど、こんなに一生懸命やったの初めてだよ。

女子 でも杉山さん、よくやってくれたわよ。彼女のミス、大変だったけど、結果的にはよく行ったんだもの。

男子A うん、そうだな。

恵 よかったわね、杉山さん。

男子B 今年の文化祭は、うちのクラスが一番になりそうじゃないかい？

厚子 ありがとう！ みんなのお陰よ。

ナレーション その時、彼女は久しぶりに友達よさに気づきました。そして、本当にうれしくなりました。

恵 ねえ、杉山さん。聖書にね、「友達の励ましは、香水をかけたように気持ちいい」ってい言ってるところがあるの。今まさにそんな気分じゃない？

厚子 ええ。わたし、今までのことから、ふっ切れそうな気がしてきたわ。初めは、わたしを執行委員に引っ張り出したあなたをうらんだけど、今はすごく感謝したい気分。

恵 うれしいわ。これでわたしたち、親友になれそうね。文化祭には教会のお友達も来てくれるの。紹介するわね。

厚子 ええ、お願い。

ナレーション その時、厚子は、「友達の励ましは、香水をかけたように気持ちいい」という言葉を心の中で繰り返しながら、しきりと聖書を読みたい気持ちに駆られていたのです。

<完>